

肖柏と池田氏

—連歌師と千句連歌主催者の関係について—

浅井美峰*

1. はじめに

連歌とは、五七五の長句と七七の短句を交互に連ねて一つの作品とする文芸のことである。

島津忠夫氏¹によれば、連歌師とは「孤高の旅人としての面影ではなく、戦国乱世のさ中に、かなり現実的な任務を帯びて、中央の貴族と地方の豪族との間を自由に往来する、たくましい生活力が注意される」存在であり、その生活は「諸国の武将にたのまれての連歌興行や、発句の染筆および、連歌の手引書の執筆、歌書類の書写などの礼物」によって成り立っていた。所謂連歌師らしい連歌師と言われるのは、宗祇に端を発する祇門の連歌師たちからだが、宗祇の師の心敬などから、各地を訪れてその地で連歌の興行に加わるということも広くされていた。

そのような連歌の興行の中でも、百句を連ねて詠む「百韻」を十回行う千句興行は、大きな意味を持って企画・開催されるものであり、地域の有力者が連歌師を招いて行う千句は、文化的意味だけでなく政治的な意味も持つものであった。

その千句の中に、永正年間（1500年代初頭）に摂津の池田で行われた「池田千句」²がある。池田の有力者である池田正盛が主催し、連歌師肖柏の庵で肖柏の他にも多くの連歌師を招いて行われたもので、歴史的側面からの研究は存在するが、池田千句の中身自体への言及は乏しい。

そこで、本稿では、「池田千句」の中での連歌

師肖柏と主催者である池田氏に焦点を当て、千句興行の中での連歌師と主催者それぞれの果たす役割や目的について明らかにしていきたい。他の千句との比較や、肖柏と他の連歌師の比較をすることで「池田千句」の特徴だけではなく、大きく連歌史上において千句興行とは、そしてそれに関わる人々の関係とはどのようなものだったかを見ていきたい。

2. 連衆（連歌参加者）と肖柏の関わり

肖柏は、嘉吉三年（1443）に中院家に通秀（十輪院内府）の弟として生まれ、大永七年（1527）四月に八十五歳で没している。早くに出家し、文明六年（1474）頃から宗祇に師事、長享元年（1487）以降は主に摂津池田を本拠として京との間を往復し、さらに永正十五年（1518）には堺に移住し、宗祇から受けた古今和歌集についての秘伝を堺の門人に伝えた。肖柏の交遊圏は、宗祇とその門下、三条西実隆をはじめとする宮中の貴族や天皇、そして、移り住んだ池田の豪族たち、その後に住んだ堺の門人たちなど、多岐に渡っている。また、自身の活動拠点を京都ではなく池田、堺に置き、その地の人々と交わった、というところも、旅に生きるという一般的な連歌師のイメージとは異なっており、地域に根差した生活をしてきたと考えられる。「池田千句」では場を取りまとめる宗匠の役割を果たしていた。

肖柏を宗匠に迎えて「池田千句」を主催したのは摂津池田の豪族の池田氏である。肖柏の草庵

*お茶の水女子大学大学院院生

(夢庵)で、池田正盛(性繁)主導によって行われている。識語によれば二月張行で、年次は確定していないが、永正五～七年(1508～1510)とされている。

「池田千句」の連衆は、宗匠の肖柏、主催者の性繁の他、職業連歌師の宗碩・泰謙・宗坡・玄清・宗哲・周桂・石文、成充³、正盛息の池田正棟、元盛、道泉⁴の十三名である。

宗碩以下石文までは、もともと池田の地にいる人ではなく都周辺を主な拠点としているが、池田までこの千句のためにやって来た連歌師たちである。たまたま池田に来ていたのではなく、おそらく肖柏が千句興行のために声をかけ呼び寄せたもので、そこには池田氏の援助ももちろんあったものと思われる。

また、性繁(正盛)と肖柏の関係については、肖柏の歌集『春夢草』に「性繁正盛入道逝去時、寿量品を書写して奥に書きつけ侍りし」として長歌(2130)を収める。全文は挙げないが、「頼りとたのむ 木のもとの 深きなさけに かかりつつ」「十とて三つになりにしを又世の乱れうち続き思ひの外にへだたりて」「ときどき通ふ鳥の跡」と、肖柏が性繁の庇護下に三十年ほどあり、しかしその後世が乱れたため池田から去らざるをえなくなり、時々文のやりとりをするくらいになってしまったことが読み取れる。

道泉についても、その死を悼む『春夢草』2131番歌や、借りた馬を返す際の1941番歌が見られ、親しく交際していたこと、池田から堺に移住した後も交流が続いていたことが分かる。

3. 池田千句の発句

百韻の初めの句を発句と言う。池田千句の第一百韻は肖柏の発句から始まっている。

- | | | |
|---|--------------|----|
| 1 | 春の花いはば心の千入かな | 肖柏 |
| 2 | 柳こきまぜ来ぬる鶯 | 性繁 |

自身の草庵での連歌で発句を詠むというのは、あまりされることではない。「客発句、脇亭主」という言葉がある。一座の中で主賓にあたる人物が発句を詠み、それに亭主が句を付ける、という基本的な発句脇句の心得を表したもので、肖柏は草庵の主であるので本来は脇句を付けるところである。

他の千句の第一百韻の発句を誰が詠んでいるかを見ると、次のようになる。

宗祇の草庵(種玉庵)で宗祇とその門弟によって巻かれた『葉守千句』第一百韻(長享元年1487十月九日)では、

- | | | |
|---|---------------|----|
| 1 | 我もとてちるか葉守の神無月 | 宗祇 |
| 2 | こほりてのこるかきは木の露 | 肖柏 |

と宗祇自身が発句を詠んでいる。

宗碩の草庵で、伊庭貞和を願主として、ほぼ宗碩、宗長、三条西実隆の三吟から成る『伊庭千句』の第一百韻(大永四年1524三月十七日)では、

- | | | |
|---|--------------|----|
| 1 | やまさむみ都やたちと朝霞 | 聴雪 |
| 2 | いく一むらの風の青柳 | 貞和 |
| 3 | 春深き川そひ蘆へ雨見えて | 宗長 |
| 4 | おりる雁の露はらふ声 | 宗碩 |

他の三人に句を譲って、宗碩自身は四句目に詠んでいる。

自身の草庵か否かという点よりも、その一座の中にどのような人間関係があり、草庵の主がどのような位置にいるか、ということが第一百韻の初めの句を詠む順序に関わっている、と見ることができる。

その場の主人でありながら発句を詠む例としては、『飯盛千句』の第一百韻(永禄四1561年五月二十七日)がある。この千句は飯盛城の城主、三好長慶が主催して、連歌師の紹巴、宗養などを招いて興行されたものである。

- 1 汲わすれくみしる月や岩清水 長慶
 2 むらさめ晴て蛩飛くれ 一舟
 3 雁の声いつ秋風の空ならん 紹巴

主催者である長慶が発句を詠み、その後に宗匠格の一舟、紹巴らが詠んでいる。

第一百韻の発句を詠むのは、その座の中での貴人など一座の中での扱いの重い人物であり、座ごとにその人間関係は様々である。「池田千句」で肖柏が発句を詠んでいるのは、その座中で重く扱われていたことを示すものであり、草庵の場の提供以外の座の準備に必要な経済的援助などを行っていたであろう主催者の池田氏（性繁）が肖柏に発句を譲っているところに注目される。

池田において池田氏の庇護下にある、という性と性繁の方が立場として上に見えるが、肖柏の扱いが伊庭千句での宗碩や飯盛千句での紹巴のような一歩引いた連歌師としてのそれではなく、客分として、貴顕と同じような扱いがなされていたことをうかがわせる。

永正七年（1510）七月五日興行の何人百韻は肖柏、性繁、宗碩の三吟で、ここでも肖柏が発句を詠んでいるので、正盛と肖柏の関わりが密接なものであり、『池田千句』が特殊なものではなく、やはり肖柏が池田の地で非常に大事にされていたと言える。

4. 夢庵について

池田の草庵（夢庵）については、肖柏の随筆『三愛記』の中の風流な描写などにより池田氏の援助によってかなり立派なものであったことが窺われ、また長谷川千尋氏にも指摘があるが⁵、永正十年（1513）興行の「牡丹花⁶宗碩両吟百韻」の注から、その年に新しく庵の建て替えが完了していることが分かる。

- 1 逢にあひぬとふは鶯花の宿 肖柏
 問ては鶯、宿は花の宿、能似たるとなり。宿を花になすこと斟酌なれども、人をうぐひすになすゆへなり。

津国池田、牡丹花を在国させ申、新造建てられ候。然者、宗碩被参候。そのあひさつなり。

傍線部は池田氏が肖柏を池田に留め置いていたが、ここで草庵を新たに建てたということを表している。その夢庵の新造に先行して、永正五年～七年の期間に興行されたのが「池田千句」である。

連歌への参加は確認できないが、同じく池田に庵を結んだ人物として、正広が挙げられる。家集「松下集」を見ると、池田氏の法楽のための和歌を依頼されて詠むなど、密接なつながりを見ることができる。肖柏と正広の扱いには共通するものがあり、池田氏が文化的なもの、文学を重んじ、それに伴い文化人を厚く遇していたことが分かる。

5. 連衆の千句中の句数について

表1は、池田千句のそれぞれの百韻（第一～第十）で、連衆の誰が何句詠んだかをまとめたものである。一番下の数字は千句の中で詠んだそれぞれの連衆の合計句数である。

池田千句中、肖柏は最も多くの句を詠んでいる。十人前後の連衆が居る場合、平均すると、一人が10句前後詠めば一つの百韻になるはずである。その中で、平均して肖柏は15.4句詠んでいる計算になる。

この数字について、他の千句のデータと比較してみたい。表2は河越千句⁷、表3は飯盛千句⁸の句数について表1と同様にまとめたものである。

比較して見ると、河越千句で宗匠の役割をしている心敬の句数は、池田千句での肖柏の句数とほぼ同じである。飯盛千句の宗匠格の宗養や同じ句数の一舟の句数を見ると、少し他の二つの千句よ

りは総句数は少ないが、やはり連衆の中では多い句数を詠んでいる。宗匠は座の中でも多くの句を出し、重んじられる存在だったと言えるだろう。

他方、総句数ではなく各百韻での句数を見ると、特に百韻中一・二句ではなくコンスタントに句を出している人のものは、どの百韻でもほぼ同じ数字になっている。特に飯盛千句では、句数が非常に綺麗に揃っている。千句連歌の傾向の通時的な変遷（の有無）は今後考えていかねばならないが、この三つの千句を見るだけでも、千句連歌においては、その座の中での立場などから、どのくらいの句数を詠むかがほぼ決まっていたのではないかと考えられる。

この句数の傾向だけを見ても、百韻を、そして千句を完成させるためには、座でのそれぞれの立場を鑑みつつ、文学的な質を落とさずに連歌を巻いていくという高度な能力が連歌師たちには、さらに言えばその座の連歌を取り仕切る宗匠には求められていた、とすることができる。

『池田千句』では、肖柏がその宗匠の役割を果たしている。そこで肖柏の句の出し方に注目すると、句数の多さ以外にも、他の千句にはあまり見られない特徴がある。それは、二句連続して句を詠む（一か所）、二句おいてまたすぐに句を出す（十六か所）ということである。

十二人連衆が居るのに、同じ人が句を出したあとにすぐまた句を詠む、一つの百韻に一か所か二か所そのような句の偏りが見える、というのはあまり一般的なことではない。これは、他の連衆に能力が欠如していて、肖柏の句を付ける能力が高い、という問題ではない。さらには、その座で優遇されていて誰も意見せず遠慮の要らない立場だったから、ということでもない。

もちろん、他の連衆への配慮をする必要があまり無いほどその場での肖柏の立場は上に位置していた、と見ることもできるが、そうであったら総句数ももっと膨大なものになるはずである。しかし実際は『河越千句』の心敬とほぼ同じ句数にと

どまっている。この句の偏りには、肖柏のこの連歌を成功させようという強い意識を見ることができる。

もともとの持ち句数がほとんど決まっていたとするならば、自分が次から次に句を出すだけでは百韻にならない。どうしても必要な場合には連続して句を出すことも辞さないが、それ以外の句を詠んでいないところでも、他の連衆に句を出すように促し、特に職業連歌師ではない性繁には気を配っていたのではないか。それが、この句数と偏った句の連続という現在見ることのできる一見矛盾する事象の意味なのではないか、と考える。

6. おわりに

肖柏が池田の地で、池田氏の援助を受けながら生活していたことはよく知られ、『池田千句』はその期間中に肖柏が成した最も大きな事績の内の一つである。そこでは、千句が滞りなく満尾するように他の連歌師を集め、句を詠む際にも他の連衆がきちんと句を出せるように進行に気をつかっていた肖柏の姿をうかがうことができる。

主催者の目的のために連歌を成功させる、という役割はその千句興行に参加した職業連歌師すべてに求められるものだが、そのなかでも、宗匠の果たした役割がとて大きいものであったことが『池田千句』からは読み取れるのである。

連歌という文芸が文学的であると同時に政治的な意味合いを持つもので、そこに参加する際には調和的な姿勢が重要だったことが分かり、これは今日のグローバル的な姿勢に通じるものだと考える。

注

- 1 「連歌師の生活」（『島津忠夫著作集』第二巻 連歌、和泉書院、2003年）
- 2 古典文庫『千句連歌集 七』に依る。
- 3 未詳。写本ではウ冠に充の字。連歌師か。
- 4 元盛、未詳。道泉と同じく正盛の臣か。

- 5 「夢庵新造と牡丹花肖柏」（北海道大学文学研究科紀要 第125号、2008年）
 6 牡丹花は肖柏のこと。
 7 文明二年（1470）一月に河越城の太田道真のもの

とで行われた千句。古典文庫『千句連歌集 五』に依る。
 8 永禄四年（1561）五月に飯盛城の三好長慶のもとで行われた千句。古典文庫『千句連歌集 八』に依る。

表 1

池田千句														
	肖柏	性繁	宗碩	泰謙	宗坡	玄清	宗哲	周桂	石文	成充	道泉	正棟	元盛	
第一	15	11	10	13	11	12	11	3	1	1	10	0	2	100
第二	15	13	12	11	11	12	10	1	1	3	10	0	1	100
第三	17	10	12	12	11	12	11	3	1	1	9	0	1	100
第四	14	12	12	12	10	12	10	1	1	5	10	0	1	100
第五	17	10	13	13	12	13	12	1	1	1	7	0	0	100
第六	14	12	13	13	11	12	10	1	3	3	8	0	0	100
第七	17	10	12	11	11	12	10	2	3	1	9	2	0	100
第八	15	11	12	12	14	9	11	1	2	3	8	2	0	100
第九	17	12	12	12	12	10	10	2	1	1	9	2	0	100
第十	13	13	13	10	13	8	12	1	1	4	8	4	0	100
	154	114	121	119	116	112	107	16	15	23	88	10	5	
	宗匠	主催	連歌師					連歌師？						

表 2

河越千句														
	心敬	道真	宗祇	印孝	中雅	長敏	永祥	義藤	修茂	長剗	興俊	幾弘	満助	
第一	16	11	12	8	9	9	7	5	8	3	1	1	10	100
第二	16	11	13	6	8	10	1	5	10	4	2	7	7	100
第三	14	11	12	4	9	13	7	6	8	1	1	7	7	100
第四	15	11	13	8	8	10	8	6	8	2	1	8	2	100
第五	15	11	13	7	8	9	1	4	10	4	2	8	8	100
第六	15	10	13	5	9	10	6	5	10	3	1	6	7	100
第七	16	11	14	8	9	10	9	3	9	2	1	1	7	100
第八	16	11	11	5	9	8	8	6	8	1	1	8	8	100
第九	15	11	14	7	7	12	7	6	1	1	1	9	9	100
第十	17	11	13	9	7	9		5	8	4	1	9	7	100
	155	109	128	67	83	100	54	51	80	25	12	64	72	
	宗匠	主催	連歌師				連歌好士							

表 3

飯盛千句

	宗養	長慶	紹巴	一舟	快玉	為清	元理	玄哉	真識	仍景	淳世	興久	宗仍	
第一	12	12	9	12	8	10	9	7	7	5	4	1	1	97
第二	12	12	11	12	9	9	10	7	7	5	4	1	1	100
第三	12	11	11	12	8	8	10	7	8	6	5	1	1	100
第四	12	12	11	12	8	9	9	7	8	5	4	1	2	100
第五	12	12	11	12	8	10	9	9	6	5	4	1	1	100
第六	12	12	11	12	9	9	7	8	7	6	5	1	1	100
第七	12	12	11	12	9	9	6	9	8	5	4	1	1	99
第八	12	11	11	12	7	7	8	9	8	7	6	1	1	100
第九	12	12	11	12	9	9	8	10	7	5	3	1	1	100
第十	12	13	12	12	7	8	7	8	6	6	6	2	1	100
	120	119	109	120	82	88	83	81	72	55	45	11	11	
	宗匠	主催			僧			茶人		昌叱				

上の表は、それぞれの千句の連衆について、第一から第十百韻でそれぞれ何句詠んでいるかを表したものである。

横軸が各百韻での句数、縦軸が連衆を表し、それぞれの小計を付した。

連衆の順序は左から、宗匠、主催者、連歌師、それ以外、の順で並べている。